

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2014-9882

(P2014-9882A)

(43) 公開日 平成26年1月20日(2014.1.20)

(51) Int.Cl.	F 1	テーマコード (参考)
F 2 4 F 6/00 (2006.01)	F 2 4 F 6/00 A	3 L 0 5 5
	F 2 4 F 6/00 F	

審査請求 未請求 請求項の数 5 O L (全 12 頁)

(21) 出願番号	特願2012-146486 (P2012-146486)	(71) 出願人	000109026
(22) 出願日	平成24年6月29日 (2012. 6. 29)		ダイニチ工業株式会社
		(72) 発明者	内海 茂雄
			新潟県新潟市南区北田中780番地6
			ダイニチ工業株式会社内
		(72) 発明者	大平 健介
			新潟県新潟市南区北田中780番地6
			ダイニチ工業株式会社内
		(72) 発明者	渡邊 直紀
			新潟県新潟市南区北田中780番地6
			ダイニチ工業株式会社内
		Fターム(参考)	3L055 BA02 DA02 DA14

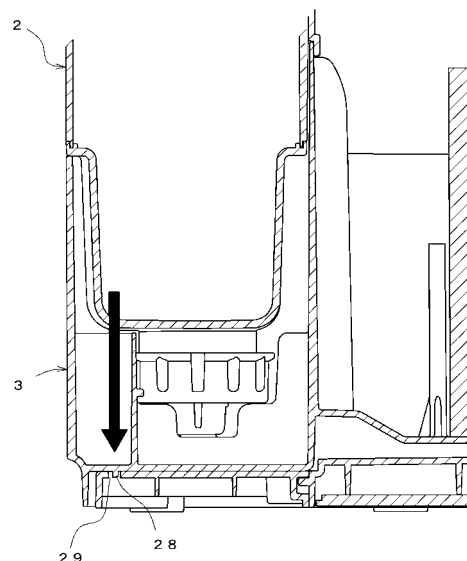
(54) 【発明の名称】 加湿装置

(57) 【要約】

【課題】デザイン上の制約を受けたり、本体や部品が破損することなく、安全かつ確実に本体から水タンクや水槽部が脱落することが防止される加湿装置を提供すること。

【解決手段】本体1と水槽部3とを係止機構28、29によって係止するようにした加湿装置であって、水槽部1に装着した水タンクが係止機構28、29に対し水槽部3を本体1に係止する方向の力を加えるように構成した。水タンク2が装着されている場合は、係止機構自身の係止力に加えて水タンク2の荷重が水槽部3を本体1に係止させる力として働くので、確実に水槽部3が本体1から脱落するのを防止することができる。また、水タンクが装着されていなければ水槽部3を本体1に係止させる力は働かないので、本体1から水槽部3を容易に取り外すことができる。

【選択図】 図6



【特許請求の範囲】**【請求項 1】**

加湿装置の本体と、前記本体に着脱自在に装着される水槽部と、前記水槽部に着脱自在に装着されて前記水槽部に水を供給する水タンクと、前記水槽部を前記本体に係止する係止機構とを備え、前記水タンクが前記水槽部に装着された状態において、前記水タンクは前記係止機構に前記水槽部を前記本体に係止する方向の力を加えることを特徴とする加湿装置。

【請求項 2】

前記係止機構は前記水槽部底部および前記本体に設けられた係止片と嵌合孔からなることを特徴とする請求項 1 記載の加湿装置。

10

【請求項 3】

前記係止機構は前記水槽部底部に設けられた係止片と、前記本体に設けられた嵌合孔であることを特徴とする請求項 2 記載の加湿装置。

【請求項 4】

前記係止機構は前記水槽部底部および前記本体のそれぞれに設けられた係止片であることを特徴とする請求項 1 記載の加湿装置。

【請求項 5】

前記水タンクは下部が前記水槽部に挿入されるとともに、加湿装置の外装の一部を形成することを特徴とする請求項 1 から 4 のいずれかに記載の加湿装置。

【発明の詳細な説明】

20

【技術分野】**【0001】**

本発明は、室内の乾燥を防止するための加湿装置に関するものである。

【背景技術】**【0002】**

従来、加湿装置においては、水を供給する水タンクや水を気化させる水槽部を本体に着脱自在に設けたものが一般的である。そしてこのような加湿装置は、通常、水タンクや水槽部を本体に装着した状態で持ち運びされるため、運んでいる最中に本体から水タンクや水槽部が脱落すると部品が破損したり、また落下した部品でケガをするおそれがあることから、水タンクや水槽部が脱落しないような構造とする必要がある。

30

【0003】

水タンクや水槽部の脱落を防止する方法の一つとして、本体を安定して運べるように持ち手を設けることが考えられる。例えば、特許文献 1 のように、本体の側面下部に切欠きを設け、さらにこの切欠き内部に手挿入部を設けることにより本体を運ぶ際に傾いたりしないようにしたものがある。

【0004】

また、別の方法としては、水タンクや水槽部を本体に引っ掛けるなどして固定するようにしたものがあり、例えば特許文献 2 では本体側に爪を設け、この爪に水タンクを引っ掛けるようにして水タンクを脱落させないようにしている。

【先行技術文献】

40

【特許文献】**【0005】**

【特許文献 1】特開 2004 - 044904 号公報

【特許文献 2】特開 2005 - 061753 号公報

【発明の概要】**【発明が解決しようとする課題】****【0006】**

しかしながら、本体に持ち手を設ける場合、本体を安定して持ち運べることが絶対条件であることから、持ち手の位置を決める際には本体の重心などを考慮しなければならず、持ち手を自由に配置することができない。そのため、何かしらデザイン上の制約を受ける

50

ことになる。特に、水タンクが外装の一部を形成するようなデザインの場合、水タンクと被らない位置に持ち手を配置しなければならないため、一層持ち手の配置が限定されてデザイン上の制約が厳しくなることが予想される。

【０００７】

また、水タンクと本体を爪などで係止させる構造の場合、係止部分の強度は他の部分に比べて弱いので、もしタンクを本体に装着する際に誤って途中で手を離して落としたりすると、爪が破損してしまい水タンクを係止する機能を果たせなくなってしまうおそれがある。

【０００８】

本発明は、上記課題を解決するためのもので、デザイン上の制約を受けたり、本体や部品が破損することなく、安全かつ確実に水タンクや水槽部の脱落を防止できる加湿装置を提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【０００９】

本発明は、加湿装置の本体と、前記本体に着脱自在に装着される水槽部と、前記水槽部に着脱自在に装着されて前記水槽部に水を供給する水タンクと、前記水槽部を前記本体に係止する係止機構とを備え、前記水タンクが前記水槽部に装着された状態において、前記水タンクは前記係止機構に前記水槽部を前記本体に係止する方向の力を加えることを特徴とする加湿装置である。

【００１０】

また、前記係止機構は前記水槽部底部および前記本体に設けられた係止片と嵌合孔からなることを特徴とする請求項１記載の加湿装置である。

【００１１】

また、前記係止機構は前記水槽部底部に設けられた係止片と、前記本体に設けられた嵌合孔であることを特徴とする請求項２記載の加湿装置である。

【００１２】

また、前記係止機構は前記水槽部底部および前記本体のそれぞれに設けられた係止片であることを特徴とする請求項１記載の加湿装置である。

【００１３】

また、前記水タンクは下部が前記水槽部内に挿入されるとともに、加湿装置の外装の一部を形成することを特徴とする請求項１から４のいずれかに記載の加湿装置である。

【発明の効果】

【００１４】

上述のように構成することにより、水タンクを本体に装着すれば、水槽部を本体に係止する力を加えられるため、確実に本体から水タンクや水槽部が脱落することを防ぐことができる。

【図面の簡単な説明】

【００１５】

【図１】本発明の加湿装置の外観図である。

【図２】本体から水タンクと水槽部を取り外した状態を示す図である。

【図３】水槽部の上面図である。

【図４】加湿装置の断面概略図である。

【図５】実施例１の係止機構を示す図である。

【図６】実施例１において水タンクが装着されているときの係止機構の作用を説明する図である。

【図７】実施例１において本体から水槽部を取り外すときの係止機構の作用を説明する図である。

【図８】実施例２の係止機構を示す図である。

【図９】実施例２において水タンクが装着されているときの係止機構の作用を説明する図である。

10

20

30

40

50

【図 10】実施例 2 において本体から水槽部を取り外すときの係止機構の作用を説明する図である。

【図 11】実施例 3 の係止機構を示す図である。

【図 12】実施例 3 において水タンクが装着されているときの係止機構の作用を説明する図である。

【図 13】実施例 3 において本体から水槽部を取り外すときの係止機構の作用を説明する図である。

【発明を実施するための形態】

【0016】

好適と考える本発明の実施形態を、本発明の作用効果を示して簡単に説明する。

10

【0017】

本発明は、水槽部や水タンクの脱落を防止するために本体と水槽部とを係止機構によって係止するようにした加湿装置であって、水槽部に装着した水タンクが係止機構に対し水槽部を本体に係止する方向の力を加えるように構成した。

【0018】

つまり、本体と水槽部はもともと係止機構によって係止されているが、水タンクが装着されている場合は、係止機構自身の係止力に加えて水タンクの荷重が水槽部を本体に係止させる力として働くので、加湿装置を持ち運ぶ際にも確実に水槽部が本体から脱落するのを防止することができる。また、水タンクが装着されていなければ係止機構に対して水槽部を本体に係止させる力は働かないので、本体から水槽部を容易に取り外すことができる。

20

【0019】

また、水槽部底部と本体に係止機構を設けることで、水槽部に装着された水タンクの荷重が係止機構を上から押さえつける力として働くので、この力を水槽部と本体とを係止させる力として利用することができる。また水タンクは直接係止機構とは接触しないので、水タンクを水槽部に装着する際に誤って落としてしまっても、係止機構が破損するおそれもない。

【0020】

また、係止機構に係止片と嵌合孔から構成し、係止片を水槽部底部に設け、嵌合孔を本体に設けることで、本体側の嵌合孔は貫通孔とすることができるため、簡単な構造で係止機構を構成することができる。

30

【0021】

また、係止機構を働かせるためには水タンクを装着するだけでよく、本体の外装にはなんら影響を及ぼさないため、水タンクが外装の一部を形成するようなデザインの場合でも、持ち手の配置などのデザイン上の制約を受けることなく、確実に水槽部が本体から脱落するのを防止することができる。

【実施例 1】

【0022】

以下本発明の一実施例を図面により説明する。

【0023】

40

図 1 は本発明の加湿装置の外観図である。加湿装置は、本体 1 と、加湿装置に水を供給する水タンク 2 と、水タンク 2 から供給される水を一定量貯える水槽部 3 から構成されていて、水槽部 3 は本体 1 に引き出し可能に設けられるとともに、水タンク 2 は水槽部 3 に対して上から着脱自在に設けられている。また、本体 1 の上面には加湿空気を吹き出す吹出口 4 が設けられ、両側面の上部には加湿装置を持ち運ぶ際に手を掛けるための持ち手 5 が形成されている。

【0024】

図 2 は本体 1 から水タンク 2 と水槽部 3 を取り外した状態を示す図である。本体 1 の前面は、上部が本体前面壁 6 で覆われるとともに、本体前面壁 6 の下部には開口 7 が設けられた構造となっており、この開口 7 を介して本体 1 内の下部には水槽部 3 を収容する空間

50

となる水槽収容部 8 が形成されている。水槽部 3 はこの水槽収容部 8 に引き出し可能に配置される。さらに本体 1 の背面には室内の空気を取り入れる吸込口 9 が設けられ、吸込口 9 はこの水槽収容部 8 と連通している。また、本体前面壁 6 の下端には、本体前面壁 6 よりわずかに水槽収容部 8 内に入り込むようにして段差部 6 a が屈曲形成されている。

【 0 0 2 5 】

水タンク 2 は、内部の水量が透視できるように透明もしくは半透明の合成樹脂から形成されていて、水槽部 3 に装着した際に自立するよう、水槽部 3 内に下部が挿入された状態で水槽部 3 上に載置され、上部は加湿装置の外装の一部を形成している。また、この水タンク 2 は加湿装置の外装となる上部タンク 1 0 と、水槽部 3 内に挿入される下部タンク 1 1 とを別体で作成した後、上部タンク 1 0 と下部タンク 1 1 とを溶着して成形されている。

10

【 0 0 2 6 】

上部タンク 1 0 は、水タンク 2 が水槽部 3 に装着された状態において、本体前面壁 6 と接するようになっており、その上面には水タンク 2 を水槽部 3 から取り外す際の持ち手となるタンク取手 1 2 が形成されている。また、下部タンク 1 1 は、上端を外周方向に延設して形成された段部 1 3 を有するとともに、底面にはタンクキャップ 1 4 が取り付けられ、タンクキャップ 1 4 に形成された給水口 1 5 より水槽部 3 に水が供給されるようになっている。

【 0 0 2 7 】

水槽部 3 は、中央に仕切板 1 6 が立設し、この仕切板 1 6 を挟んで手前側には水タンク 2 の下部タンク 1 1 を収容する水タンク収容部 1 7、奥側には気化フィルタ 1 8 を収容する気化フィルタ収容部 1 9 とに区画されており、水槽部 3 を本体 1 に装着すると、気化フィルタ収容部 1 9 が水槽収容部 8 内に収容されるようになっている。そして、気化フィルタ収容部 1 9 が水槽収容部 8 内に完全に収容されると、仕切板 1 6 の上端が本体前面壁 6 に設けられた段差部 6 a に当接して水槽収容部 8 が閉塞される。さらに、水タンク収容部 1 7 側の下方には凹みを設けて水槽部取手 2 0 が形成されており、この水槽部取手 2 0 に下から手を掛けて引くことで水槽部 3 が本体 1 から引き出される。

20

【 0 0 2 8 】

図 3 は水槽部 3 の上面図であって、水タンク収容部 1 7 は、底部にタンクキャップ 1 4 を受けるキャップ収容部 2 1 が形成され、仕切板 1 6 にはリブ 2 2 が複数形成されている。このリブ 2 2 は、水槽部 3 の強度を上げるとともに、水タンク 2 が装着されたときに、水タンク 2 の段部 1 3 をこのリブ 2 2 の上面で受けるために設けられたものである。このリブ 2 2 を設けることにより、水槽部 3 は水タンク 2 の段部 1 3 の全周と当接するため、水タンク 2 を安定して支えることができる。

30

【 0 0 2 9 】

気化フィルタ収容部 1 9 は、内部に複数のガイド棒 2 3 を備えており、ガイド棒 2 3 の間に気化フィルタ 1 8 を沿わせることで、気化フィルタ 1 8 を正しい位置に取り付けることができる。

【 0 0 3 0 】

仕切板 1 6 には水タンク収容部 1 7 と気化フィルタ収容部 1 9 を連通する連通孔（図示せず）が設けられており、水タンク 2 から水槽部 3 に供給された水は、水タンク収容部 1 7 からこの連通孔を介して気化フィルタ収容部 1 9 に流入し、気化フィルタ 1 8 の毛細管現象によって吸い上げられることで気化フィルタ 1 8 が水を含んで湿潤する。

40

【 0 0 3 1 】

図 4 は加湿装置の縦断面構成図である。気化フィルタ 1 8 の上部にはモータ 2 4 とシロッコファン 2 5 からなる送風機 2 6 と、本体 1 に送風機 2 6 を取り付けるとともに、加湿空気の通路を形成するファンケーシング 2 7 が設けられている。この送風機 2 6 が回転することで室内の空気が吸込口 9 から取り込まれ、取り込まれた空気は水槽部 3 内の水を吸い上げて湿潤している気化フィルタ 1 8 を通過することで加湿空気となり、ファンケーシング 2 7 と本体前面壁 6 の間を通過して吹出口 4 より室内に放出される。

50

【 0 0 3 2 】

水タンク収容部 17 の底面には係止片 28 が設けられるとともに、係止片 28 に対向して本体 1 の底面には嵌合孔 29 が設けられ、この嵌合孔 29 と係止片 28 によって係止機構が構成されている。図 5 はこの係止機構の拡大図であり、水タンク収容部 17 の底面に設けられた凸状の薄片である係止片 28 が、本体 1 底部に設けられた嵌合孔 29 に上から嵌り込むようになっており、本体 1 に水槽部 3 を装着すると、係止機構により水槽部 3 が本体 1 に係止した状態となる。さらに水槽部 3 には水タンク 2 の荷重が加わることにより上から係止片 28 を押し付ける力が働き、係止機構の係止力が増すため、加湿装置を持ち運ぶ際などに本体 1 を傾けたとしても、水槽部 3 が本体 1 から外れてしまうことを防止している。一方で、本体 1 から水槽部 3 を取り外す際には、水槽部 3 をわずかに持ち上げる

10

【 0 0 3 3 】

また、水槽部 3 が正しく本体 1 に装着されていないと、係止片 28 が嵌合孔 29 に嵌らないため、水槽部 3 が半掛かりの状態で使用されることも防止される。もし水槽部 3 が半掛かりになっていると、本体 1 の開口 7 が完全に閉塞されずに隙間が空いてしまい、本体 1 内の空気流が変化するため加湿性能が低下してしまうといった問題が発生する。しかし、係止機構を設けたことにより、水槽部 3 は本体 1 に正しく装着されることとなり、水槽部 3 の装着の不備が原因となる加湿性能の低下を未然に防ぐことができる。

【 0 0 3 4 】

なお、本実施例においては、嵌合孔 29 は本体 1 の底面を貫通して形成されているが、係止片 28 の形状に合わせて凹状に窪ませてよい。また、係止機構は 1 箇所のみ設けているが、複数設けることとしても構わない。

20

【 0 0 3 5 】

次に、水槽部 3 と本体 1 との係止機構の作用について図 6 および図 7 を用いて詳しく説明する。

【 0 0 3 6 】

図 6 は、水槽部 3 に水タンク 2 が装着されているときの係止機構を説明する図である。水槽部 3 に水タンク 2 が装着されていると、図中の矢印で示すように水タンク 2 の荷重が水槽部 3 に対して下向きに加わっており、これが係止片 28 を嵌合孔 29 に押し付ける力として働いている。つまり、水タンク 2 が装着されることにより、係止機構を解除するためには大きな力が必要となるので本体 1 から水槽部 3 が外れにくくなる。したがって、水タンク 2 が装着されていれば、持ち運びの際に加湿装置を傾けても、水槽部 3 が本体 1 から外れてしまうことが確実に防止されることとなる。なお、水タンク 2 は、水槽部 3 に保持されているため、水槽部 3 が本体 1 から外れなければ水タンク 2 が本体 1 から脱落してしまうこともない。

30

【 0 0 3 7 】

一方、図 7 は、本体 1 から水槽部 3 を取り外すときの係止機構を説明する図である。本体 1 から水槽部 3 を取り外す際には、まず最初に水タンク 2 を取り外しているため、図 6 のように係止機構に対して上から押さえつける力は働いていない。この状態で、水槽部取手 20 に下から手を掛けると、図中の矢印で示すように本体 1 に対して水槽部 3 を上方に持ち上げる力が加わる。水槽部 3 を持ち上げる方向と係止機構を解除する方向は同じであるため、水槽部 3 を持ち上げることにより係止片 28 が嵌合孔 29 から抜け、係止機構が解除される。そして、水槽部 3 手前に引き出すことで水槽部 3 を容易に取り外すことができる。

40

【 0 0 3 8 】

ところで、係止片 28 と嵌合孔 29 のクリアランスを可能な限り小さくしてきつく嵌り込むようにすれば、本体 1 と水槽部 3 を係止する力が強くなり水槽部 3 の脱落を防ぐことができる。しかし、本体 1 から水槽部 3 を取り外す際に必要な力も大きくなるため、水槽部 3 が引き出しにくくなって使勝手が悪くなってしまう。これに対して、本発明の構成に

50

よれば、本体 1 と水槽部 3 の係止には、係止片 2 8 と嵌合孔 2 9 の係止力だけでなく、水タンク 2 の荷重を加えるようにしたため、係止片 2 8 が嵌合孔 2 9 にきつく嵌り込むようにしなくとも、水タンク 2 が装着されていれば本体 1 と水槽部 3 を係止する力を強くすることができる。一方、本体 1 から水槽部 3 を取り外す際には、水槽部 3 に対して水タンク 2 の荷重は加わっていないため、係止片 2 8 を嵌合孔 2 9 から抜くために大きな力が必要なく、容易に係止機構を解除することができる。

【0039】

そして、係止機構を働かせるためには水タンク 2 を水槽部 3 に装着するだけでよく、もしも、水タンク 2 を装着する際に途中で手を離して水タンク 2 を水槽部 3 上に落としてしまったとしても、水タンク 2 は係止片 2 8 とは接触していないので係止片 2 8 が破損するおそれもない。加えて、係止機構は本体 1 の外装にはなんら影響を及ぼさないため、持ち手の配置などのデザイン上の制約を受けることなく、確実に水槽部 3 が本体 1 から脱落するのを防止することができる。

【実施例 2】

【0040】

次に、図 8 ～ 図 10 に基づき本発明の加湿装置の実施例 2 を説明する。なお、本実施例の特徴は、係止片 2 8 と嵌合孔 2 9 の配置場所および形状が実施例 1 と異なる点である。その他の点においては実施例 1 と同じであるため説明を省略する。

【0041】

図 8 は、実施例 2 の係止機構を示す図である。本体 1 の底面に凸状の係止片 2 8 が設けられており、この係止片 2 8 と対向して水タンク収容部 1 7 の底面には嵌合孔 2 9 が設けられている。なお、水タンク収容部 2 7 には水タンク 2 から供給された水が貯えられるため、嵌合孔 2 9 は貫通孔ではなく水タンク収容部 2 7 の底面に対して凹状の窪みとして形成する。

【0042】

図 9 は、水槽部 3 に水タンク 2 が装着されているときの係止機構を説明する図である。図中の矢印で示すように水タンク 2 の荷重が水槽部 3 に対して下向きに加わっており、これが嵌合孔 2 9 を係止片 2 8 に押し付ける力として働いている。つまり、水タンク 2 が装着されることにより、係止機構を解除するためには大きな力が必要となるので本体 1 から水槽部 3 が外れにくくなる。したがって、持ち運びの際に加湿装置を傾けても、水槽部 3 が本体 1 から外れてしまうことが確実に防止されることとなる。なお、水タンク 2 は、水槽部 3 に保持されているため、水槽部 3 が本体 1 から外れなければ水タンク 2 が本体 1 から脱落してしまうこともない。

【0043】

一方、図 10 は、本体 1 から水槽部 3 を取り外すときの係止機構を説明する図である。本体 1 から水槽部 3 を取り外す際には、まず最初に水タンク 2 を取り外しているため、図 9 のように係止機構に対して上から押さえつける力は働いていない。この状態で、水槽部取手 20 に下から手を掛けると、図中の矢印で示すように本体 1 に対して水槽部 3 を上方に持ち上げる力が加わる。水槽部 3 を持ち上げる方向と係止機構を解除する方向は同じであるため、水槽部 3 を持ち上げるにより嵌合孔 2 9 が係止片 2 8 から抜け、係止機構が解除される。そして、水槽部 3 手前に引き出すことで水槽部 3 を容易に取り外すことができる。

【実施例 3】

【0044】

次に、図 11 ～ 図 13 に基づき本発明の加湿装置の実施例 3 を説明する。なお、本実施例の特徴は、係止機構が 2 つの係止片 2 8 a と 2 8 b からなることが実施例 1 および 2 と異なる点である。その他の点においては同じであるため説明を省略する。

【0045】

図 11 は、実施例 3 の係止機構を示す図である。本体 1 の底面に係止片 2 8 a が設けられ、この係止片 2 8 a と近接して水タンク収容部 1 7 の底面にも係止片 2 8 b が設けられ

ており、この２つの係止片 28 a と 28 b が噛み合うことで本体 1 と水槽部 3 が係合する。水槽部 3 を係止片 28 a の高さ分上に持ち上げると、係止片 28 a に係止片 28 b が乗り上がって係止機構が解除される。

【0046】

図 12 は、水槽部 3 に水タンク 2 が装着されているときの係止機構を説明する図である。図中の矢印で示すように水タンク 2 の荷重が水槽部 3 に対して下向きに加わっており、これが係止片 28 b を押し付ける力として働いている。つまり、水タンク 2 が装着されることにより、係止機構を解除するためには大きな力が必要となるので本体 1 から水槽部 3 が外れにくくなる。したがって、持ち運びの際に加湿装置を傾けても、水槽部 3 が本体 1 から外れてしまうことが確実に防止されることとなる。なお、水タンク 2 は、水槽部 3 に保持されているため、水槽部 3 が本体 1 から外れなければ水タンク 2 が本体 1 から脱落してしまいうこともない。

10

【0047】

一方、図 13 は、本体 1 から水槽部 3 を取り外すときの係止機構を説明する図である。本体 1 から水槽部 3 を取り外す際には、まず最初に水タンク 2 を取り外しているため、図 12 のように係止機構に対して上から押さえつける力は働いていない。この状態で、水槽部取手 20 に下から手を掛けると、図中の矢印で示すように本体 1 に対して水槽部 3 を上方に持ち上げる力が加わる。水槽部 3 を持ち上げる方向と係止機構を解除する方向は同じであるため、水槽部 3 を持ち上げるにより係止片 28 b が係止片 28 a に乗り上がって、係止機構が解除される。そして、水槽部 3 を手前に引き出すことで水槽部 3 を容易に取り外すことができる。

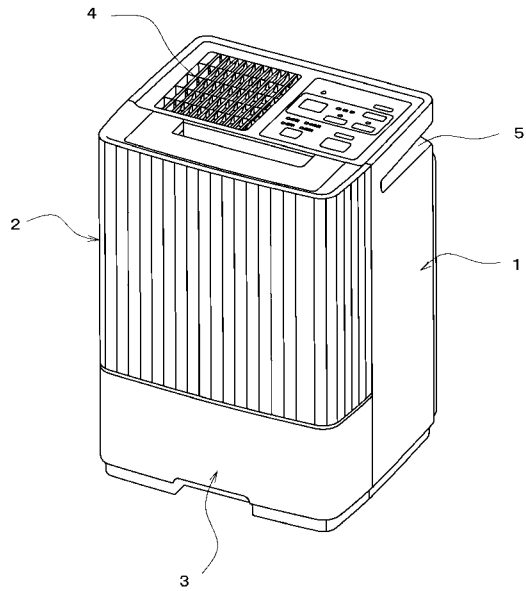
20

【符号の説明】

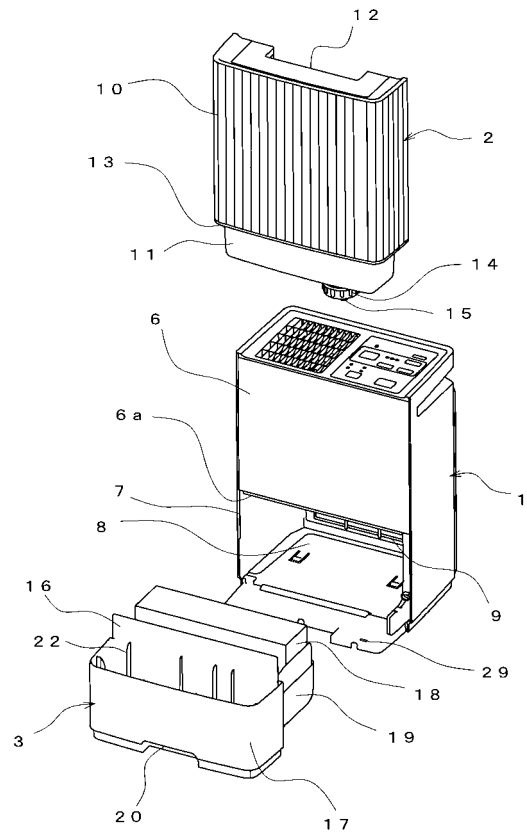
【0048】

- 1 本体
- 2 水タンク
- 3 水槽部
- 28、28 a、28 b 係止片
- 29 嵌合孔

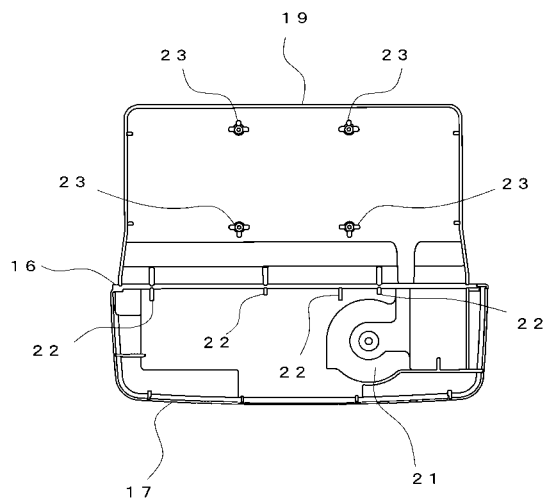
【図 1】



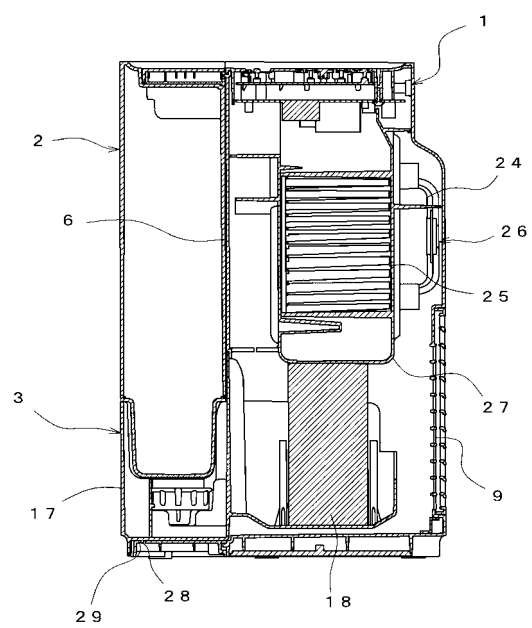
【図 2】



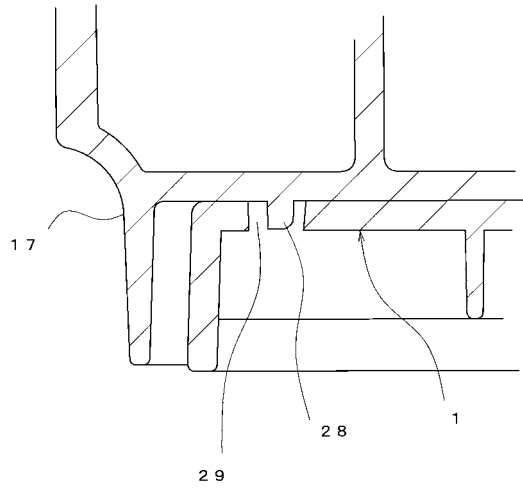
【図 3】



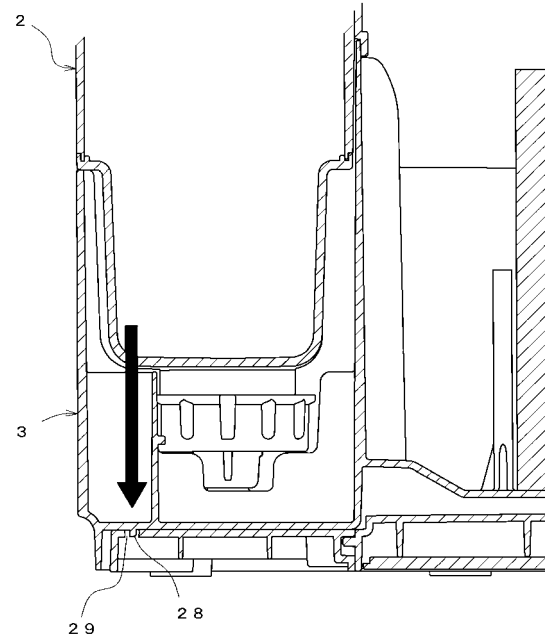
【図 4】



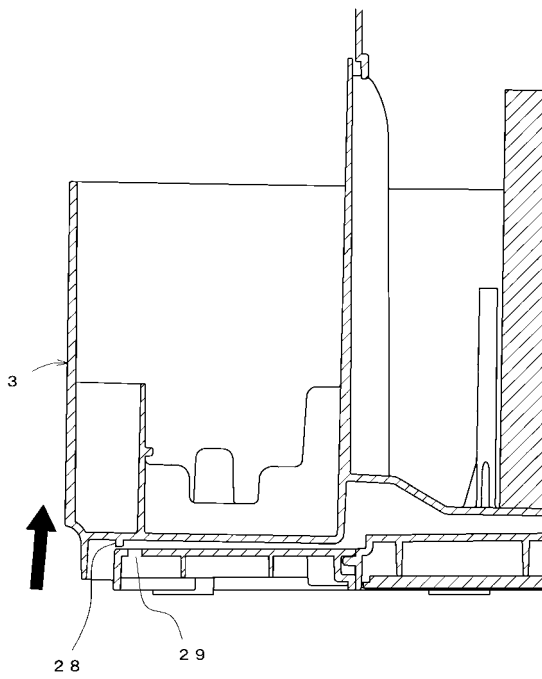
【図 5】



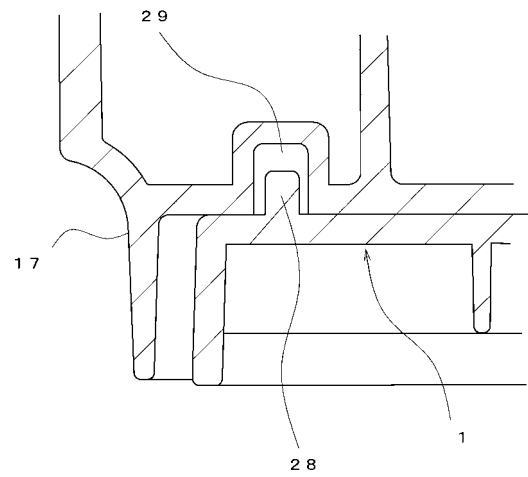
【図 6】



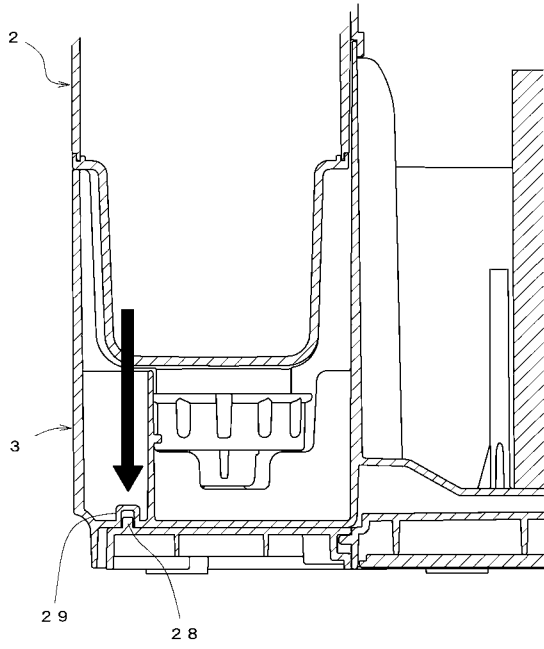
【図 7】



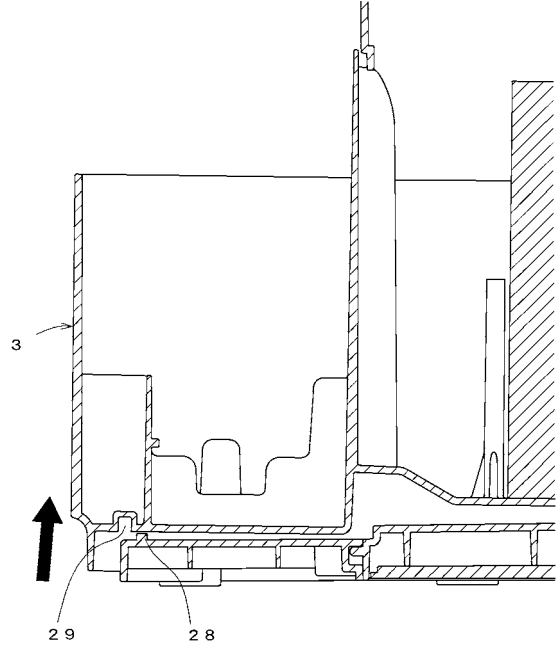
【図 8】



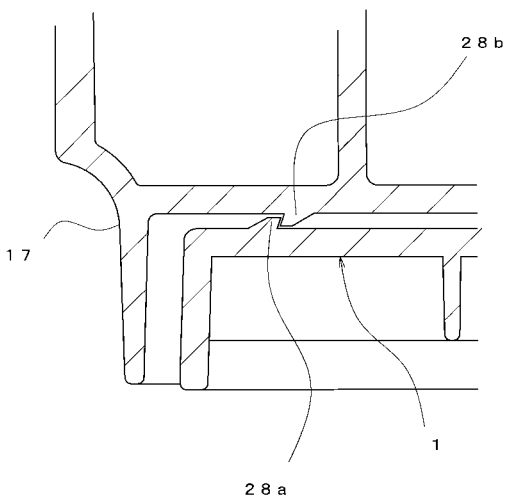
【図 9】



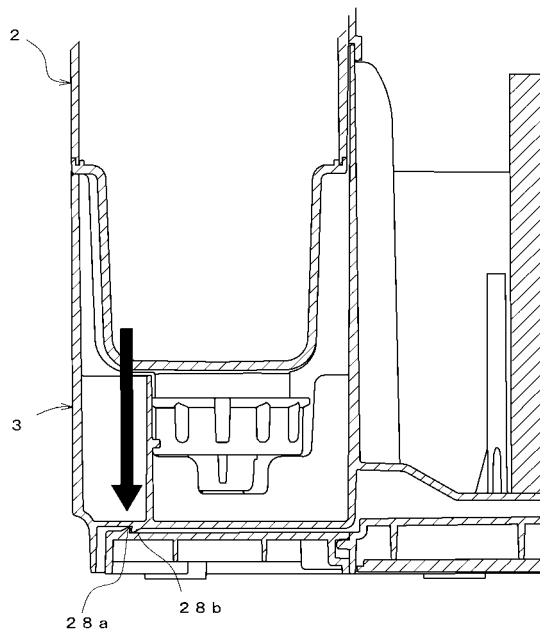
【図 10】



【図 11】



【図 12】



【図 13】

